

転校生なギャル JK はダークエルフ！？ 1 章序幕

癒し庵もち猫 クアトロ

0-1:序幕 1

眠い、とても眠い。

昨晚も夜遅くまでゲームをしてしまった。

今ハマっているのは、大作 RPG の続編だ。

7 つの種族から主人公を選び、プレイヤーとして操作出来る。

僕はダークエルフを選択した。

自由度の高いオープンワールド、大勢のプレイヤーとの交流。

とても魅力的だ。

だからつつい夢中になり、夜更かししてしまう。

眠い、とても眠い。

登校中にも関わらず、意識を持って行かれそうだった。

“彼女”が現れるまでは—

眠気と正気の間、目の前の歩行者信号が点滅し始めた。

ついてない。

思わず舌打ちしそうになる。

すると直ぐ隣りから女性の声が聞こえた。

同じく信号に引っかかり、苛立っているらしい。

???「ちっ、ついてねえな。急いでんのに。」

かなり乱暴な口調だ。

と同時に甘い香りがふわりと鼻先を撫でた。

思わず目が冴え、隣りに目をやる。

先ず目に入ったのは、さらりと伸びた綺麗な銀髪。

続いて褐色の肌に、尖った耳。

あり得ない…。

“その女性は紛れもなくダークエルフだった”

制服はウチの学校のモノだ。

つまり、コスプレか？

いや、コスプレにしては手が込み過ぎている。

それにコスプレをして学校に来る生徒など、ウチには居ない。

じゃあ目の前にいる“彼女”は何だ？

余りの眠気で夢でも見ているのか？

もしかしてこれはゲームの中なのか？

考えを巡らせている内に“彼女”を凝視してしまっていた。

我に返った時にはもう遅かった。

??? 「何ジロジロ見てんのさ？その制服、同じ学校の子だよね。」

同じ言語を話している。

じゃあやはりコスプレなのか？

??? 「なあってば。何見てんのって聞いてんだけど。」

聴き手「おはよう。いい天気だね。」

??? 「は？何言ってるの。曇りじゃん。」

ありきたりな挨拶を放つも、見事に撃ち落とされた。

マズい。

会話が続かない。

どうすればいい？

もしゲームの中なら、選択肢が出るはずだ。

...。

出ない。

つまり、これは現実？

“彼女”が何か言っている。

??? 「あ...、...い。...なあってば！」

そこでようやく“彼女”の言葉に意識が行った。

聴き手「何？」

??? 「信号、青だっつてんの。」

聴き手「本当だ。行こうか。」

何故か一緒に登校するつもりでいる僕は、一体何様なんだろう。

??? 「はぁ？知らねーヤツと初登校なんてイヤに決まっくんじゃん。」

そりゃそうだ。

ん？

今、初登校と言ったか？

確認しようと目線を上げると、“彼女”はもう数十メートル先を走っていた。

足、速いんだな。

妙に冷静になる。

“彼女”の放つ香水とも違う甘い残り香…。

分厚い鉛色の雲で覆われた空…。

嫌な予感がしていた…。

0-2:序幕 2

教室はいつも以上にザワついていた。

そんな喧噪の中、僕は相変わらず眠気と戦っていた。

男子 A「なあ、聞いたか？転校生の事。」

男子 B「聞いた！すっげー美人らしいぞっ！」

男子 C「マジかよ！オレ、最初に声かけようかな！」

女子 A「男子うるさーい。」

女子 B「ほーんと、サイテー」

転校生…。

こんな時期に？

転校生と聞いて、途端に目が冴えてきた。

このパターンは漫画やアニメでよくあるやつだ。

つまり、この後待ち構えているのは…。

ガラリと教室のドアが開く。

担任が見覚えのある生徒を引き連れて入ってきた。

ビンゴ！

今朝の“彼女”だ。

やはり間違いない。

どう見てもダークエルフだ。

なのにどうした…。

クラスメイトは驚くどころか、男子は歓声、女子は何故か黄色い声を上げている。

ちょっと待て。

ダークエルフだぞ？

担任がピシヤリと一喝し、ザワつきは止んだ。

そして“彼女”の紹介を始めた。

至って普通、ありきたりな紹介だった。

そんなバカな。

皆どうしてしまったんだ？

それとも僕だけがおかしいのか？

“彼女”は黒板にたどたどしく名前を書き始めた。

酷く乱れた字だったが、読めないレベルでは無かった。

ナナリー「どうもー。ナナリーでーす。今日からよろしくー。」

担任が僕の隣り、空席を指差している。

ナナリー「あー、はい、あそこの席ですね。りょうかーい。」

こんな展開、漫画やアニメでしか見た事がないぞ…。

そこでふと考えを巡らせる。

…。

そうか。

“そういう事か”

なら利用させてもらうまでだ...

僕はペンを走らせた。